

【書 評】

Jeff Tan

*Privatization in Malaysia:
Regulation, Rent-Seeking and Policy Failure*

清水一史

I

本書は、マレーシアの民営化について政治経済学的に論じた著作である。3つの問い——（1）なぜ発展途上国で民営化が行われるのか？（2）なぜ民営化が失敗するのか？（3）民営化を機能させるには何が必要か？——を投げかけ、それらに対してマレーシアの4つの事例を検討して説明している。

民営化は、1980年代前半頃から世界的な潮流となった。1980年代前半には、主要先進国において新古典派経済学に基づく新保守主義型の経済政策が採用され、途上国の開発においても、市場の役割を重視する新古典派の考え方が主流になった。そして国営企業も市場に任せて民営化すべきとされ、先進国においても途上国においても国営企業の民営化が行われてきた。しかし民営化は、先進国においても順調に進んだわけではなく、発展途上国では、先進国以上に様々な問題を抱えてきた。

マレーシアは、これら発展途上国の中でも盛んに民営化を進めた国の一つであった。マレーシアの政府系企業の非効率性についてはすでに1970年代から議

論されてきたが、マレーシアの民営化は1980年代前半になって求められ、1980年代後半以降に、とりわけ1991年に出された民営化マスタープランにより加速した。マレーシアが民営化を進めた理由としては、政府財政の逼迫、政府系企業の非効率性への対応などがあげられる。またそれだけではなく、新経済政策（NEP）の下でのブミプトラの経済活動の拡大やブミプトラ企業家の育成にも関係している。更に1980年代に入ってからマハティール政権とも関連して進められてきた。これらは、マレーシアの民営化に特有な点であった。

本書は、マレーシア関連の研究書の出版では定評のあるRoutledge社の*Malaysian Studies Series*の第6冊目として出版された書物である。このシリーズはMalaysian Social Science Association（MSSA）の協力を得て出版されてきている。本書の初版は2008年にRoutledgeから刊行され、ペーパーバック版は同じくRoutledgeから2010年に刊行されている。本書評は、2010年刊行のペーパーバック版をもとにしている。

II

本書は全8章からなる。第1章「イントロダクション—なぜ民営化か？」は本書のイントロダクションであり、なぜ途上国で民営化が推進されるのかという根本的な疑問を提示している。そして前述の3つの問いを投げかけ、それらの問いに対してマレーシアの4つの事例を検討して説明していくことを述べる。また、民営化の失敗の主要な要因は政治的要因であり、民営化がなぜ失敗するのかについて、民営化の背後にある政治的動機と国家の政治能力の制約を考察することによって説明していくことを述べる。

第2章「民営化、レント、レントシーキング」は、マレーシアの民営化を分析するための理論枠組みを検討する章である。とりわけ、民営化とこれに関わり発生するレント並びにレントを求める（レントシーキング）民間部門について理論的な考察を行っている。ここでは主流の経済理論が政治的側面や制度的側面を考慮していない点などを指摘し、既存の経済理論が途上国の民営化を説明するには不十分であることを指摘する。更に比較制度論的な考察でさえ不十分であるとの見解を示し、政治的な側面を加えた第3章へとつながる。

第3章「制度と政治の失敗—マレーシアにおける民営化」は、マレーシアの民営化における政治的文脈を理解するための章である。第2章で示された理論フレームワークによって、3つの問いをマレーシアのケースに適用し、マレーシア

の民営化プログラムを検討している。次章以降の事例研究の基礎であり、本書の中心と言える章でもある。

本章で、マレーシアの場合、経済的な要因よりも政治的な要因が重要であるとの見解を、これまでの民営化のプロセスから導き出している。対象とする期間は1983年から2000年までである。方法論としては、民営化の失敗を民営化前と民営化後のそれぞれにおいて、制度面の失敗と政治的失敗の双方から考察する。そして筆者は、民営化後の失敗（事後の失敗）をより重視する立場をとっている。事後の失敗とは、事前の失敗を修正する「国家能力」が欠如していることによる失敗である。

マレーシアに特有な政治的な側面として、筆者は、NEPの推進によるマレー中間層またはマレー資本家の出現を、政権与党であるUMNO内部のパワーバランスの変化および特定政治家と企業家との間のパトロン—クライアント関係の構築により説明している。この関係は民営化とその失敗にも大きく影響している。

第4章から第7章では、マレーシアの民営化の4つの事例として、①マレーシアの下水処理システム（IWK）、②クアラルンプールのLRT、③マレーシア航空（MAS）、④国民車を製造するプロトン社（PROTON）を事例研究として取り上げ、それぞれについて詳細な分析を行っている。それぞれのタイトルは、第4章は「普遍的アクセスと民間供給—マレーシアの国営下水処理システム」、第5

章は「民営化された都市鉄道の神話—クアラ Lumpur LRT」、第6章は「逆の誘因—マレーシア航空」、そして第7章は「レントと産業高度化—プロトン」である。

これら4つの事例は、それぞれ課題、背景、成果、問題点（事前の失敗と事後の失敗）に分けて分析されている。これらの4つの事業はすべて再度国有化されており、筆者はこれらすべての民営化を失敗例としている。それぞれ対象となる事業が異なるが、事前の民営化計画、事後の民営化維持のための政策の失敗という点で共通している。

第8章は「要約と結論」である。最初に提起された3つの問いに4つの事例から答える中で、それらの民営化の失敗について、事前と事後における制度的並びに政治的制約、とりわけ事後の政治的制約を原因と結論付けている。そして成功する民営化は、適切な制度設計だけではなく国家の政治能力によるとし、それゆえに民営化は、国家が必要な制度的政治的能力を有している場合にのみ可能となるとしている。

III

本書は、マレーシアの民営化の4つの代表的な事例をあげ、それらの詳細な分析を行うことにより、マレーシアの民営化の失敗の原因を浮き彫りにしている。特に筆者のいう民営化の事前と事後の失敗を明確にした。それぞれの事例研究も大変興味深いものであり、それらは、各国の民営化の問題点はそれぞれの国

に特有な社会関係やパワーバランスにより異なるため、各個の事例研究によってのみこれを明らかにできるという筆者の考えを具体化したものである。

また本書により、マレーシアの政治と経済の関係を理解することができる。難解な経済の専門用語はなく、経済の専門家以外にとっても読みやすい内容となっている。更に、個別の事例研究から、マレーシア特有の政府と企業の実態に即して理解することができる。

学問的系譜においては、本書は、比較制度分析アプローチに近い分析手法を用いている。比較制度分析は、経済開発に対する政府の役割を踏み込んで考察する手法である。また本書の手法は、発展途上国の政策策定や実施能力など国家の制度能力について考察する手法とも近い。そしてマレーシアを対象とした研究の流れの中では、Jomo, K. S. や Gomez, E. T. などのマレーシア政府の諸政策を批判的に検討する政治経済学的研究の一つと言える。本書でも多くの部分で Jomo や Gomez の引用が見られる。

具体的な分析手法においては、民営化の事前と事後の両面から民営化をとらえる視点を導入した点に特徴がある。また、経済学や制度能力の視点だけでは不十分であり、政治的な要因を付け加えるべきとの認識と手法は、途上国の事例をみる場合には、より有効であると言える。

ただし、政治的要因を考慮に入れる場合、どの程度までこれを取り込むかは研究者の判断にゆだねられ、換言すればそこに主観的な見解が入り込む余地があ

る。この点に関しては慎重な対応が求められるであろう。またデータ上の制約があり経済学的な分析が困難であることは筆者も述べているが、もう少しこれらに基づく評価がなされるべきとも考える。

更に無いものねだりとは思いますが、評者としては、マレーシア以外の諸国、たとえばいくつかの条件の似ているタイなどのASEAN諸国との比較も知りたいところである。本書では、マレーシアに特殊な政治面が強調されるが、各国の特殊な面とともに、ASEANなどの地域全体が前提とする条件、あるいはより広くその時代の世界経済において前提とされる

条件も、他方で重要と考えるからである。また評者の研究分野からは、ASEANが2015年のAEC確立へ向けて統合を進めていく中で、マレーシアの民営化がどのように進展するのかにも関心がある。2008年の世界金融危機後の世界経済の構造変化の中で、それがどのように進むのかについても関心を持っている。

本書は、マレーシアの民営化やマレーシアの政治と経済の関係を知る上で、格好の著作である。是非ご一読頂きたい。そして筆者の次の著作を大いに期待したい。

(Routledge、2007年9月、23.4 × 15.6 × 2 cm、256 ページ)

(しみず・かずし 九州大学)